

一本の銀の針

小川未明

青空文庫

一

兄と妹は、海岸の砂原の上で、いつも仲よく遊んでいました。

おじいさんは、このあたりでは、だれ一人、「海の王さま」といえば、知らぬものはないほど、船乗りの名人でありました。ほとんど一生を海の上で暮らして、おもしろいこと、つらいことのかずかずを身に味わつてきましたが、いつしか年を取つて、船乗りをやめてしまいました。

おじいさんに、一人のせがれがありました。やはり、おじいさんと同じように船乗りでした。ある日のこと、家に、おじいさんと、女房と二人の子供を残して、沖の方へと出かけてゆきました。

おり悪しく、その晩に、ひどいあらしが吹いて、海の中は、さながら渦巻きかえるように見られたのでした。家族のものは心配しました。そして、どうか無事に帰つてくれるようとに待つていましたけれど、ついに、海へ出ていつたせがれは、それぎり帰つてきました。おじいさんは、あのあらしのために、破船して死んでしまったのだろうと思

いましたが、女房や、孫たちが、悲しむのをたまらなく思つて、

「どこかへ避難しているかもしれない。もう二、三日待つてみよう。」といいました。
人間というものは、どんな不幸に出あつても、日数のたつうちにには、だんだん忘れて
しまうものであつたからです。

二日たつても、三日たつても、せがれの乗つた船はもどつてしまませんでした。ある日の
こと、その船の破片が波に打ち寄せられて、浜辺に上がりました。それを見たときに、ど
んなにおじいさんは、悲しんだりありました。せがれの女房はあまりの悲しみから、
ついに病氣となり、それがもととなつて死んでしまいました。

二人の子供は、父を失い、母に別れて、そのときから、おじいさんに育てられたのであ
ります。海の上を吹いてくる風が、コトコトと窓の戸をたたく音を聞くと、おじいさんは、
それでもせがれが生きていて帰つてきたのではないかと耳を傾けました。また、夜中に、
波の音が、すすり泣くように、かすかに耳にひびくと、おじいさんは、せがれの女房
のことを思い出しました。それにつけてもおじいさんは、一人の孫たちをかわいがつたの
であります。

月日は、いつのまにかたつてしましました。兄と妹の二人は、仲よく、海岸の砂原

で、白に、黄に、いろいろの花をつんだりして遊んでいますうちに、大きくなりました。ふたりは、両親がなかつたけれど、おじいさんがかわいがつてくださされたので、幸福がありました。

あに 兄は、だんだん年を取ると、自分もどうか船乗りになりたいと思いました。おじいさんは、大事なせがれが海で死んでから、どうしても孫を船乗りにさせようとは思いませんでした。

「海の王さま」と、おじいさんが、みんなからいわれたということを聞くと、兄は、どうかして自分も船乗りの名人になりたいものだと考えたのです。

「僕は、どうしてもおじいさんにお願いして、船乗りにしてもらいたい。」と、兄は、妹に向かっていました。

「兄さんが、海へいってしまわれたら、私はどんなに寂しいかしれない。」と、妹は、はや涙ぐんで答えました。

いもうとたい 妹に対して、やさしかつた兄は、なぐさめるように、

「あの遠い海のあちらには、不思議な島があつて、そこへゆけば、いろいろの珍しいものがあるというから、それをお土産に持ってきてあげよう。」といいました。

妹は、おじいさんからも、その不思議な島の話を聞いていました。海の中にはなしきしまはなし。
獣の牙や、金色をした鳥の卵や、香水の取れる草や、夜になると新しい声を出して、唄をうたう貝などがあるということを聞いていましたから、「兄さん、私に、金色の鳥の卵と、夜になると唄を歌う貝を、お土産にかならず持つてきてください。」と頼みました。

金色の卵は、鶴にあたためさせて、美しい鳥にかえさせようと思つたからです。

「じゃ、忘れずに持つてきてあげるから、おまえもおじいさんに、僕の望みをかなえてもらいうように頼んでくれ。」と、兄はいました。

妹は、承知して、兄がおじいさんに頼んだときに、自分もいつしょになつて願つたのであります。

おじいさんは、すぐにはうんとはいひませんでした。

「おじいさんを、みんなが海の王さまといつていたということを聞きました。どうか、僕を、第二の海の王さまにさしてください。」と、兄はいました。

「おまえが、その決心をしてくれるのはうれしいが、またあらしにあつて船がこわれたら、とりかえしのつかないことになつてしまふね。」と、おじいさんは、思案をしました。

しかし、ついに、孫たちのいうことを許してやりました。

一一

おじいさんは、孫がいよいよ船出をするというので、夜もおそらくまで起きていて、船に張る帆を縫つていました。どんな強い風に当たつても裂けぬように、またどんなに雨や波にぬらされても、破れぬようになると、念に念をいれて造つていました。

妹は、兄さんといつしょになつて、船出の許しをおじいさんに頼んだものの、兄の身の上が案じられてしかたがありませんでした。

「どうかして、兄さんが無事に、出ていつて帰つてこられるように。」と、祈つたのあります。

その日も、妹は、兄のことを心配しながら道を歩いてくると、さびしいところに小川が流れていて、そこに、狭い橋がかかつており、一人のおばあさんが、その橋を渡ることができずにこまつっていました。

だれも、人が通らなかつたので、だいぶ長い間にここに、こうしておばあさんは立つてい

るものと思われたのであります。

いもうと
妹は、そのおばあさんを見ると氣の毒になりました。自分がどうかして手でも引いて渡わわたさせてあげようと、そばへいつてみますと、おばあさんは盲目めくらであります。

いもうと
妹は、びつくりしました。こんな盲目めくらがどうして、このあたりまで一人でやつてこれらたろうかと思われました。

「どんなにか、おばあさん、お困りでしたでしょう。私が手を引いてあげます。」と、妹とはいいました。

すると、盲目めくらのおばあさんは、

「どうかおぶつて、渡わたしておくれ。」と、それがあたりまえであるというような調子ちようしで答えたのです。

いもうと
妹は、ずいぶん横おうぢゃく着きなおばあさんだと心に思いました。また自分がおぶつては、あぶなくて渡わたられないからでした。

いもうと
「お手を引いてあげましょう。」

「いいえ、おぶつてもらいましょう。」と、おばあさんは、頭を振つていいました。

いもうと
妹はしかたなく、苦心くしんをして、そのおばあさんをおぶつて、ようよう橋はしを渡わたることがで

きました。すると、盲目のめくらおばあさんは、もう白くなつた髪の毛を探つて、その中から一本の銀の針ぎんを取り出しました。

「この針は、不思議な、どんな願いごともかなう針だから、これをおまえさんにお礼れいとしてあげる。けつして、みだりに他人たにんにやつたり、見せたりしてはならぬ。」といつて、おばあさんは銀の針ぎんを妹いもうとにくれました。

妹いもうとは、喜んで家に帰りました。そして、その晩に、おじいさんが帆を縫うてつだいをして、おばあさんからもらつた銀の針ぎんで、どうか兄にいさんが無事に帰つてきてくださるよう祈りながら縫いました。細い銀の針ぎんでは、厚い布あつきれがよく通りそうもないのに、よく通りました。不思議な針だから、きつとおじいさんの造つてくださつた帆は、けつして、風かぜにも、雨あめにも、破れないであろうと思ひました。

三

真まつ白しろな帆ほが、でき上あがつて、それが船に張られたのです。そして、ある朝あさ、若者わかものは、妹いもうとや、おじいさんに見送られて、この海岸かいがんから沖おきをさして船出したのであります。

だんだん沖へ、沖へ出ると、そこはものすごい景色であります。白い波は、今まで自分たちばかりの遊び狂うところだと思つていたのに、真っ白な帆をかけた船が、中へ割り込んできたものだから、びっくりしました。

「この世界は、おれたちの世界だ。それなのに、おれたちよりもっと白い大きなものが、頭の上を平氣で踏んでゆくとはけしからん。」といつて、波は騒ぎたてました。

いくら波が騒いでも、昔海の王さまといわれた、おじいさんの孫の乗つている船は平へ氣であります。波の上を越して、もつと沖へ、沖へとこいでゆきました。

「あちらの島に着いて、金色の卵、夜になるとおもしろい唄をうたう貝を拾つてきて、妹への土産にしよう。自分がこの航海を無事に終えたら、もうりつぱな船乗りだ。いつか、海の王さまの後継ぎだという評判がたつであろう。」と、若者は、そう思わずにいられなかつたのです。

波は、いくら騒いでも、どうすることもできませんでした。そのとき、空を風が通りかかつた。波は、日ごろはあまり仲はよくなかつたけれど、こんなときは味方になつてもらおうと思つましたから、風を呼び止めて、

「あんな小さい船のぶんざいで、私たちの世界をかつてに乗りまわすなんて生意気じやあ

りませんか。沈めてしまおうと思ふんですが、私たちの力ばかりではだめですから、ひとつ助けてください。」と頼みました。

風は、そういつて頼まれると、いやだとはいえなかつた。それに、自分がひとあばれしてみたいと思つていたやさきでありますから、

「よろしい、大いにあばれてみましよう！」と、ただちに受け合ふと、もう、高く怒り声をたて、白い帆を張つた小船に向かつてぶつかりました。小船は、木の葉のように波の上でほんろうされていました。

若者は、おじいさんもかつて、こうしたためにあつて、それに戦つてきましたことを思い出しました。またお父さんは、やはりこんなめにあつて、船がこわれて沈んでしまつたのであると考へました。彼は、いまこそ自分の力を試すときだと思つて、力いっぱい風と波とに戦つたのであります。

しかし、風の助けを得て、波はますます高くなりました。そして、白い帆の上を越すようになりました。

若者は、せつかくここまできながら、望みの島に着くことができず、空しく海底のもくずになつてしまふのかと残念がりました。また岩の上に降りていたたくさんのはいわお

鳥は、波に足場をさらわれてしまつて、あらしの叫ぶ空の中で、しきりに悲しんで鳴いていました。そのうちに、日が暮れてしまつた。

夜になつても、風は、静まりませんでした。波は、はやく船を沈めてしまわなければならぬと、四方から打ち寄せてきました。若者は、おじいさんことを思い、また妹のことを思い出しました。

おじいさんの造つてくださつた帆は、この風にも裂けませんでした。若者は、どこへなりと風の吹く方向へ押し流されてゆこうと、運命に身を委せてしまつたのです。

あたかも、暗い雲を破つて月が照らしました。月は、海の上をくまなく、ほんのりと明るくしました。そのとき、白い帆の端で、異様な輝きを放つたものがあります。船の中で頭を抱えていた若者には、それがわからなかつたけれど、目ざとい風はすぐにそれを見つけました。妹が、兄さんの無事を祈るために、盲目のおばあさんからもらつた銀の針を、だれも気のつかないところに刺しておいた、それに月が映つたのであります。

風は、その光を見てびっくりしました。その光の中に、あの怖ろしい盲目のおばあさんが、じつとしてすわつていたからでした。

盲目で、白髪のおばあさんは、北极の氷の上にいるおばあさんです。波でも、風

でも、おばあさんの住んでいる国へいったものは、おばあさんの機嫌きげんしだいで、すぐにも息の音いきねを止められたり、また凍らせられたりするのでした。

あらしは、おばあさんを見みると、ぴたりとやんで、こそこそとどこへか逃にげてゆきました。波なみもまた静かになつてしましました。こうして、若者わかものは無事に島しまを探たんけん検かえして帰かえるよと、はたして、みんなから、第二の海うみの王おうさまと呼ばれたのでした。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 5」講談社

1977（昭和52）年3月10日第1刷

初出：「少年倶楽部」

1927（昭和2）年2月

※表題は底本では、「一本《ほん》の銀《ぎん》の針《はり》」となつてゐます。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2014年2月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) に作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

一本の銀の針

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>